

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：31604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01100

研究課題名（和文）古代エジプト国家形成期における儀礼と権力に関する考古学研究

研究課題名（英文）Archaeological studies on elite ritual and power during the formative stages of Egyptian civilization

研究代表者

馬場 匡浩（Baba, Masahiro）

東日本国際大学・エジプト考古学研究所・客員准教授

研究者番号：00386583

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ファラオが誕生するにいたる古代エジプト国家形成期（前4000年紀）において、儀礼祭祀の実践がエリートの特権と地位の維持向上をもたらすという命題について、ヒエラコンポリス遺跡の発掘調査から検討することを目的とする。結果、支配者墓地の北端にて人口的マウンドが発見され、そこで土製人形の奉納とヒールを用いた祭祀の痕跡が発見された。墓地に隣接することからそれは祖先祭祀であり、エジプト最初の支配者による新たな供物儀礼の創出が、王朝時代の王の儀礼祭祀につながるものと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究は、エジプト文明の基層を理解することに他ならない。ファラオは神と対話できる唯一の存在であり、日々神殿にて供物儀礼を行い、宇宙秩序の維持を神に願うのである。その「権力者=儀礼主体者」という構図の形成を探ることは、まさにエジプト文明成立の理解につながる。また、儀礼祭祀に着目した点は、本研究に創造性を与えてくれる。近年の複雑化社会研究では「権力資源論」という考え方が注目されている。様々な地域でこの視点から儀礼祭祀研究が行われているが、本研究によりエジプトの事例が明らかとなることで通文化的比較も可能となり、その社会的意義は少なくない。

研究成果の概要（英文）：This research aims to examine, through excavations at Hierakonpolis, the importance of elite ritual activities in enhancing and maintaining their power and the status during the formative stages of Egyptian civilization. The archaeological investigations on the northern tip of the Predynastic elite cemetery revealed an artificial mound where we found the deposits including several clay figurines for offering, small bowls for incense and small beakers for beer, all of which can be dated to the Naqada I-IIAB period. Given the location, ritual or ceremonial activities for ancestors seem to take place at the beginning of the sacred space in which the elite built their elaborate tombs and mortuary buildings. These elite features would have been important elements in the multifaceted manifestations of their cultic, sacred and political power, eventually resulting in the establishment of the king's rites and kingship.

研究分野：エジプト考古学

キーワード：古代エジプト 国家形成 権力生成 儀礼祭祀

1. 研究開始当初の背景

古代エジプトでは、紀元前 3100 年頃に一人のファラオがナイル川下流域を統治する国家が成立する。ここから王朝時代が始まる。それ以前の時代、紀元前 4 千年紀のナカダ文化が国家形成期にあたり、社会の複雑化が加速的に進行したとされる。このナカダ文化の中心地が、エジプト南部に位置するヒエラコンポリス遺跡である。これまでの発掘調査により、ヒエラコンポリスではナカダ文化期初頭（紀元前 3800 年頃）からすでに社会的格差が生じていたことが明らかとなっている。それは主に墓地にみられ、砂漠の奥地に隔離された「支配者墓地」では、長軸 4 m を超える墓壙を中心に附属墓が取り囲む複合体が複数発見されている。この遺跡では一般の人々の墓地も発掘されたが、それと比べると支配者墓地は、墓の規模と副葬品の多寡、奢侈品や威信財の存在においてその特異性は歴然であり、権力を掌握する一握りの社会集団が存在していたことは確かであろう。さらに、王朝時代でも附属墓が巨大な王墓を囲む状況を呈していることから、ファラオの墓は、ヒエラコンポリスの支配者たちが創出した墓制を起源として発展したのである。しかし、ファラオを析出するに至る権力形成の過程は、埋葬に関わる物質文化では捉えられているものの、儀礼や祭祀といった精神文化については資料不足により不明なままである。

2. 研究の目的

こうした状況の中、ヒエラコンポリス遺跡支配者墓地の北端で、儀礼祭祀に関わると思われる遺構が確認された（図 1）。それは、人口的なマウンドである。ここでは、試掘により土製人形の破片など特異な遺物が発見された。よって本研究では、本格的な調査を実施し、支配者に関わる儀礼と権力形成を考究することを目的とした。

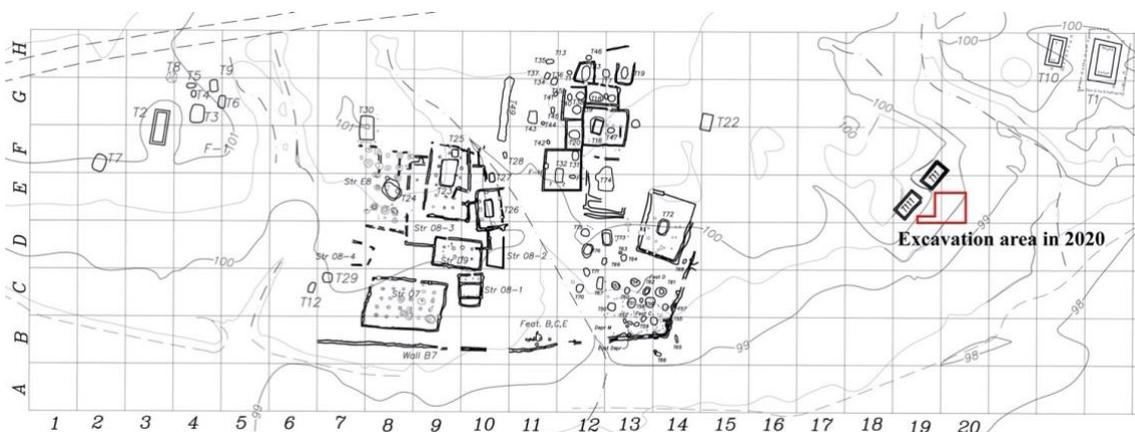


図 1：発掘区の位置（支配者墓地北端）

3. 研究の方法

(1) 発掘調査

今回対象とする発掘区は、ヒエラコンポリス遺跡支配者墓地（HK 6）北端で確認された人口的なマウンドである。2020 年から開始した本格的な調査では、10×7m グリッドを設定し、マウンド全体を露呈させることを目標に発掘を行った（図 2）。これにより以下の点が明らかとなった。

マウンドは長軸 10m ほどの規模であり、その上面と斜面は小石を含む粘土で平滑に締め固められている。硬化面の一部に白色顔料がみられ、当初は全体が白色を呈していた可能性がある。硬化面は上下に二層あり、少なくとも一度改変されたようだ。上面には大型の木杭（径 20cm 程）が 2 つ、斜面には小型の木杭が多数検出された。当該遺跡では、こうした木杭にマットを貼り付けた柵が多くみられ、このマウンドにも柵で囲まれた構造物があったものと考えられる。

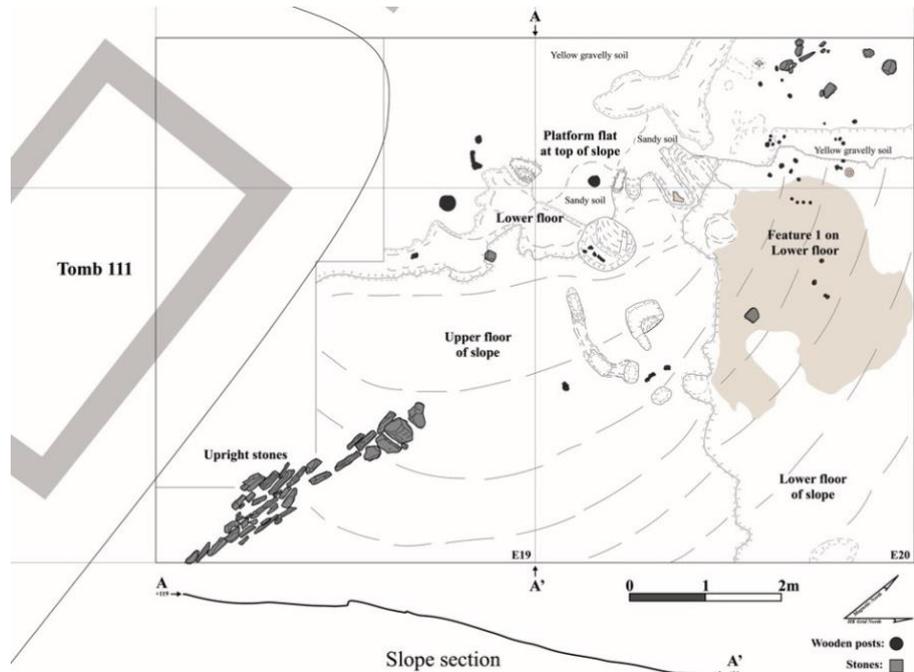


図2：マウンド検出状況

(2) 出土遺物

出土遺物として、まず特筆すべきは数多くの大型の土器片であり、接合すると全長 1.5~2m ほどの土製カバ像であることがわかった。生後半年ほどの等身大の子カバ像である。土器アッセンブリッジも特異である。赤色磨研の小型ボウル（径 11cm 程）と黒頂磨研の小型ピーカー（径 8cm 程）が全体の 80% を占める（図 3）。そのほとんどが、北側斜面の狭い範囲（Feature 1）に集中して検出された。他にも特筆すべき遺物が発見された。まずは、完形のメイスヘッドである（図 4）。閃緑岩製、直径 9cm であり、支配者墓地で 2 例目の完形資料となる。そしてもう一つが、土製人形である（図 5）。5 点の破片が発見された。鳥のような頭部を持つ人型像、指まで詳細に表現された右腕、先端が穿孔された腕、先端の尖った腕（もしくは動物角）、そして先端の曲がった腕（もしくは動物頭部）である。

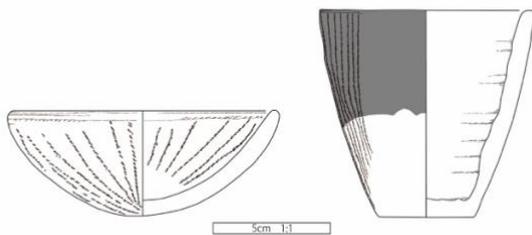


図3：小型ボウル（左）と小型ピーカー（右）

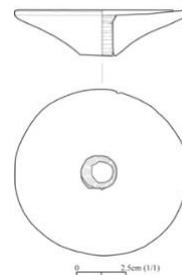


図4：メイスヘッド

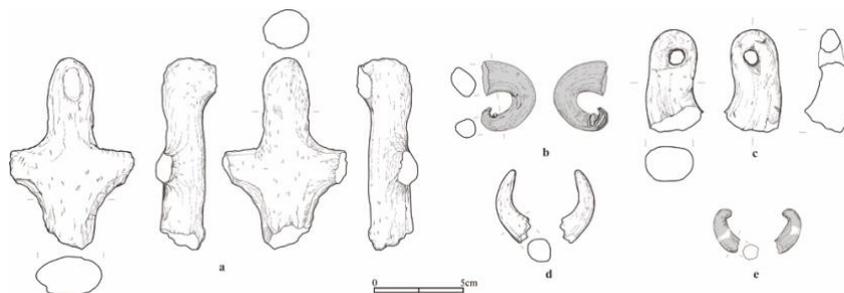


図5：土製人形

4. 研究成果

出土遺物と遺構から、このマウンドの性格を考えてみたい。まず土器であるが、小型ボウルの内面には煤の付着と被熱痕がみられる例が数多くあることから、香炉（またはランプ）として使用されたと考えられる。小型ビーカーについては、口縁や底部に使用痕があり、その器形から飲用容器と判断される。スタンフォード大学と共同研究を実施した微化石分析では、同一の器形からビール残滓が検出された（Wang, Friedman and Baba 2021）。支配者墓地近くの HK11C 生産地区にて発見されたビール醸造址では、規格化された粗製胎土の中型壺が土器アッセンブリッジの主流をなすが、これからもビール残滓が検出されている。つまり、生産地区で醸造されたビールの消費地の一つがマウンドであり、ここで中型壺から小型ビーカーにデキャンティングされたものと思われる。

土製人形に関しては、穿孔された腕はアシュモレアン博物館所蔵のナカダ遺跡出土の人形にみられ、指まで表現された腕や先端の曲がった腕はブルックリン美術館所蔵の人形にその類例を求めることができる。なお、指まで詳細に造形された人形は、先王朝時代でこれまで2点しか確認されておらず、それはママレイヤ（ブルックリン美術館所蔵）とバシレイヤ（ボストン美術館所蔵）から出土または購入したものの伝えられている。両地は、ヒエラコンポリス遺跡のすぐ近くに位置することから、こうした土製人形はヒエラコンポリスの特徴とみなすことができ、極めて特異な遺物といえる。

マウンドの位置は、集落からみると支配者墓地の入口であり、玄関口として重要かつ神聖な場所とみなすことができる。そこに設置された構造物は祠堂であり、墓地を守護する土製カバ像が安置されたと考えられる。同様な白色のマウンドは、規模は小さいが、近隣のマハスナ遺跡でも確認されており、人形やメイスヘッドを伴い、儀礼祭祀の場と解釈されている。ヒエラコンポリス遺跡のマウンドも同様に、カバ像の祠堂の御前で、香炉を焚き、ビールを奉獻し、土製人形やメイスヘッドを奉納する祭祀が催行されたのである。対象が特定の被葬者ではないことを鑑みると、それは祖先祭祀とみなすことができよう。

儀礼祭祀の構成要素の年代はどれも、類例からナカダ I-IIAB 期に比定される。これは支配者墓地の造営開始時期に相当し、マウンドの構築と活動はその当初から始まったといえる。ヒエラコンポリスでは、どこよりもはやく支配者が生まれ、かれらの地位拡大・維持をもたらす祖先祭祀が実践され、その権力イデオロギーが形成されていく。

ヒエラコンポリスでは、初期王朝時代になるとナイルの緑地帯に「ネケンの丘」が形成され、直径 50mほどの人工マウンドの上に祠堂が建ち、ここでファラオは人形・動物小像と土器を用いて大規模な供物奉獻を行った。初期のファラオたちは、先王朝時代の祖先祭祀に根ざした儀礼を実施することで、王権の正統性とその流布を図ったのである。このように、ヒエラコンポリスにて最初の支配者によって新たな祖先祭祀が創出され、それが初期王朝時代の王権維持の儀礼祭祀につながっていくものと考えられるのだ。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 伊藤結華, 馬場匡浩	4. 巻 第24号
2. 論文標題 會津八一記念博物館所蔵の黒頭赤器手付碗	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要	6. 最初と最後の頁 97-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬場匡浩	4. 巻 第27号
2. 論文標題 古代エジプトの稀覯本：シャンポリオン『ダシエ氏への書簡』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 図書の譜 明治大学図書館紀要	6. 最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Baba	4. 巻 6
2. 論文標題 Ceramic Assemblages from HK11C at Hierakonpolis: Specialization examined	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Egypt at its Origins 6. Proceedings of the International Conference	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Baba	4. 巻 -
2. 論文標題 Firing temperature of Predynastic pottery from Hierakonpolis	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Remove that Pyramid!: Studies on the Archaeology and History of Predynastic and Pharaonic Egypt in Honour of Stan Hendrickx	6. 最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wang Jiajing, Friedman Renee, Baba Masahiro	4. 巻 64
2. 論文標題 Predynastic beer production, distribution, and consumption at Hierakonpolis, Egypt	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Anthropological Archaeology	6. 最初と最後の頁 101347 ~ 101347
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jaa.2021.101347	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Heiss, A.G., Azorin, M.B., Antolin, F., Kubiak-Martens, L., Marinova, E., Arendt, E.K., Biliaderis, C.G., Kretschmer, H., Lazaridou, A., Stika, H.P., Zarnkow, M., Baba, M., Bleicher, N., Cialowicz, K.M., Chlodnicki, M., Matuschik, I., Schlichtherle, H. and Valamoti, S.M.	4. 巻 15
2. 論文標題 Mashes to Mashes, Crust to Crust. Presenting a novel microstructural marker for malting in the archaeological record	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0231696	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Baba, M and Friedman, R.	4. 巻 32
2. 論文標題 HK6: Life on the Edge	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Nekhen News	6. 最初と最後の頁 19-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Frag M.A., Elmassry M.M., Baba M. and Friedman R.	4. 巻 9
2. 論文標題 Revealing the constituents of Egypt 's oldest beer using infrared and mass spectrometry	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 16199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-019-52877-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 エジプト王朝成立とビール
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第28回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masahiro Baba
2. 発表標題 Revealing elite 's ritual landscape at Hierakonpolis
3. 学会等名 Origins 7: The 7th International Conference on Predynastic and Early Dynastic Egypt (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 古代エジプトの供物儀礼の成り立ちを考える
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第27回大
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 エジプトにおける学際研究
3. 学会等名 日本オリエント学会第62回大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 エジプト考古学のリアル
3. 学会等名 第5回西アジア考古学トップランナーズセミナー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 先王朝時代の儀礼祭祀の痕跡か？-エジプト、ヒエラコンポリス遺跡の発掘調査（2020年）-
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第28回西アジア発掘報告会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 気候変動とエジプト文明
3. 学会等名 日本西アジア考古学会公開シンポジウム「気候変動と古代西アジア - 古気候から探る文化・文明の興亡」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 エジプトを掘る
3. 学会等名 さがプロ2020五大陸考古学講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 古代エジプト最古のビール造り
3. 学会等名 酒史学会第18回大会講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 馬場匡浩
2. 発表標題 ヒエラコンポリスからみる古代エジプト都市
3. 学会等名 新学術領域研究・都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究第3回領域全体研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Baba, M.
2. 発表標題 Funerary Feasting: Logistics and Location in Predynastic Hierakonpolis, Egypt.
3. 学会等名 Ancient Art Council Fine Arts Museum of San Francisco（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Baba, M.
2. 発表標題 Egypt's oldest beer brewery discovered at Hierakonpolis
3. 学会等名 Stanford International Symposium: Alcohol, rituals and spiritual world in ancient China and beyond: An interdisciplinary perspective（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 共著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 324
3. 書名 岩波講座世界歴史02 古代西アジアとギリシア 前一世紀	

1. 著者名 Nozomu Kawai and Benedict Davies (eds.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Abercromby Press	5. 総ページ数 565
3. 書名 The Star Who Appears in Thebes: Studies in Honour of Jiro Kondo	

1. 著者名 清岡央編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 240
3. 書名 オリエント古代の探求	

1. 著者名 吉村作治編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 251
3. 書名 オシリスへの贈物 : エジプト考古学の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	オックスフォード大学			
米国	スタンフォード大学			